
実は僕らのストーリー

一ノ瀬光陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

実は僕らのストーリー

【Nコード】

N1505L

【作者名】

一ノ瀬光陽

【あらすじ】

高校へ入学してからほぼ一ヶ月。黒崎は何事もなく学生生活を送っていた。

しかし、下校途中にそれは起きてしまった。

魔との出会い。

狂気との遭遇。

平和だった世界は死の世界へと変化していく……。

五月七日 黒崎

『おはようございます！ 五月十日、水曜日！ 今日皆さん、元気ですか？ 私は見ての通り元気です！』

今日の天気は晴れ後曇り。午前中は春の陽射しが降り注ぎますが、夕方から天気が崩れ始め、夜には雨となるでしょう。

それでは最初のニュースです。笠羽市で起きている連続殺人事件についての続報です……』

……

……

…

急げ、まだ間に合う……！

狭い階段を、一人の少年が駆けていく。途中、何人かとすれ違うが気にしない。気にしてられない。

チラッと時計を見る。現在の時刻は八時十七分。タイムリミットまであと三分である。

見えた……！

廊下の一番置く。突き当たりにある教室を目指し、少年は走る。

「よっし、間に合った！」

ガラガラガラッ！

戸を思いきり開けると、クラス中の視線が集まった。
教壇に目を向ける。教師とぼっちり目が合ってしまう。

「……」

「えーっと……おはよう、ございます……?」

気まずい沈黙の中、間の抜けたチャイムが鳴り響いた。

……

……

…

高校生活が始まってはや一ヶ月。満開だった桜も散りはじめ、しだいに緑が深まっている。

最初は戸惑っていた学生生活にも、やっと慣れてきた。
勉強は大変だが、それほど苦でもない。

「黒崎く、一緒に帰ろうぜ?」

突然、後ろから声を掛けられた。振り返ると、そこには長身の男子学生が立っていた。

彼の名は朝霧 優。高校生になって初めての友達だった。

「ごめん、今日は担任と面接があるんだ……」

そう言うと、黒崎と呼ばれた少年は、申し訳なさそうに謝った。

「なんだ、今日はお前の番か。ならしょうがねえよ。」

まあ頑張れよ。あれはめんどくせえぞ……うざってえぞ……」

名字が『あ行』から始まる優は、当然出席番号も早い。
確か彼は三日前に面接を終わらせていたはずだ。

「そんなにめんどくさいの？」

「ああ……。学校生活は別にいいけど、勉強とか家族のことなんて別にいいのによ……」

その言葉に、少し胸が痛む。だがそんな素振りを見せずに、黒崎は話を続ける。

「まあそんなこと言わずに、ね？」

僕は一番最後のはずだから、先に帰っていいよ」

「じゃあそうさせてもらうかな。

それじゃあまた明日な！」

桐也は軽く手を振りながら帰る。

「さてと……」

時計をみる。現在の時刻は四時三十分を過ぎたところ。予定まではあと一時間程度といったところか。

……。

暇だ。これといって特にやることもない。いつもは優や他のクラスメイトと話すが、今日に限って誰もいない。

「まあいつか」

どんな時でも前向きに。それが黒崎のモットーである。

「せっかく誰もいないんだし、静かに本でも読むかな」

そう一人呟くと、自分の鞆から一冊の本を取り出した。こう見えて彼は読書家である。暇さえあれば、いつも本を広げている。

「さて、今日はどのくらいまで読めるかな」

……

……

…

一時間程本を読み耽っていると、一人の女子学生が黒崎を呼びにきた。確か倉といったか……。

「ごめんね、少し長引いちゃって」

倉さんは執拗に謝罪を繰り返す。それに対し黒崎は「別にいいよ」と一言告げ、教室を後にした。

さて、確か面接室でやるはずだったよね……。

面接室は一階の一番隅にある。面接を受ける者以外が近寄らないようにとの配慮だろう。別にそこまで奥まったところに造らなくてもいい気がしないでもない。

入口は木製のドアであった。少し古びたそれは、かなりの歴史を

感じさせた。

「失礼します」

ノックをし、ドアを開ける。すると目の前には磨りガラス。相談者への配慮だろう。

「すまないね、黒崎くん。ずいぶん待たせてしまった」

入った瞬間、担任の日下先生が謝ってきた。

「いえ、気にしないでください」

「そうかい？」

面接内容は予想通りだった。学校生活から始まり、自分の長所、短所、果ては家族関係まで。根掘り葉掘り、様々なことを聞かれた。

「それじゃあ君は今一人暮らしなのかい？」

「はい。とはいっても金銭面は義父に任せっきりですけど……」

「それでもすごいよ。いろいろ大変だろうけど頑張りなさい」

「はい、ありがとうございます」

担任の励ましに目頭が熱くなる。この話をする、大抵の人は「ごめん」と謝る。だがこの先生は違った。自分の過去を知った上で、頑張れと言ってくれた。その優しさが心の底から嬉しかった。

……

……

…

「おっと、もうこんな時間か」

日下先生が時計を見上げる。つられて見ると、それは五時半を示していた。

「それじゃあ今日はもう遅いから、気をつけて帰りなさい」

「はい、ありがとうございます」

「そう、気をつけてな」

駅の外に出ると、そこはすでに薄暗かった。日が長くなり始めたとはいえ、ここまで暗くなることはめったにない。朝の天気予報の通り、雨雲が空を覆っているようだった。

「ううっ、寒いな……」

夏が近づいてきたといっても、まだ夜は冷える。曇りともなれば特に、だ。

「ん？」

その時だ。雨がポツポツと降り始めたのは。

「やばい……傘持っていない……」

黒崎は一人呟く。どうしようか悩んでいる間にも、雨足はどんどん強くなっていく。

「……仕方ない」

意を決して、黒崎は雨の中を走り出す。できたばかりの水溜まりが、パシャパシャと音を立てた。

駅を真っ直ぐ南に。突き当たりのT字路を左に進んだ先に公園が見えた。入口には、『笠羽第二公園』と書かれていた。

ここは黒崎の住んでいるアパートの目と鼻の先にある。しかし駅との間に、ちょうどこの公園があるのだ。普段なら遠回りしても問題はないのだが、今は別だ。このままでは風邪をひいてしまうだろう。

それならば公園を突っ切り、直線距離でアパートを目指す！

木々が風に揺られ、ザワザワと声をあげる。少し不気味な公園の並木道を、黒崎は駆けていく。

冷たい雨が顔を打つが、気にしていられない。

雨はどんどん強くなっていく。それこそ自分の足音が聞こえなくなる程に。

無我夢中で自宅へ走る。雨粒はもうシャツにまで染み込んでいた。肌に張り付くのがひどく不快だった。

だから気づかなかった。異常な世界に踏み込んでいることに。手を伸ばせば届く距離にあるはずの現実から、遠ざかっていることに。

ふと、黒崎は走るのをやめる。疲れたからではない。前方に何かの影があったからだ。

そう、その世界は異常。現実では起きえないことが起こる。幻想の世界。狂気が渦巻く、死の世界。

その影は少女。濡れる身体は、街灯の光を反射して輝いていた。

生きるものがない世界。降りしきる雨粒は死神の愛撫にも思える。

少女の足元に転がるモノ。元は人間だったであろうその姿は、今

は見るも無惨な状態にある。

頭頂から縦に一閃。滑らかな断面からは形の崩れた内蔵やのうし
よう夥しい量の血が溢れている。

少女の手には、一振りの日本刀が握られていた。その刀身には紅
い液体が滴っているのが見てとれる。

声が出なかった。その異様な光景を前に、悲鳴すらも出すことが
できなかった。

少女がゆっくりとこちらを向く。雨と血にまみれたその姿はひど
く妖艶で、狂気を孕んでいた。

夜闇よりも深い黒が黒崎を見つめる。

沸き上がるのは恐怖。死に出会ったことへの絶望。全てが黒崎を
絡めとり、逃がさない。

雨の中を、少女が進んでくる。黒崎は背を向けることもできず、
ただ呆然と立ち尽くしていた。

死神が刀を振り上げる。ゆっくりと。それこそスローモーション
のように……。

そして。

死神の鎌が振り下ろされた。

⋮

⋮

⋮

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1505/>

実は僕らのストーリー

2010年10月9日07時46分発行